

# 大連に進出した日系企業(中国)

国際地域学部国際地域学科4年

陶 玉興

竹内章博ゼミでは地域産業政策、より具体的には中小企業に焦点を当てて調査研究を進めています。国内だけでなく、中国や東南アジアに進出している中小企業の現状とその問題点について考察しています。  
2007年3月25日から3月29日にかけて、ゼミ生など8人で大連を訪問しました。大連は遼東半島先端部に位置し、西は渤海湾、東は黄海に面しています。総人口566万人、中国東

北三省の中で、最も経済的に活気のある町です。ここには1万1000もの外資系企業が存在しますが、その3分の1は日系企業です。大連人民政府は外資を誘致するために、開発区や保税区(全国15カ所に設置、貿易サービス、国際中継貿易、輸出加工の機能を持つ)を作っており、免税等の優遇政策を実施

## 元気な8社を視察 習慣、文化の理解重要

### 習慣、文化の理解重要

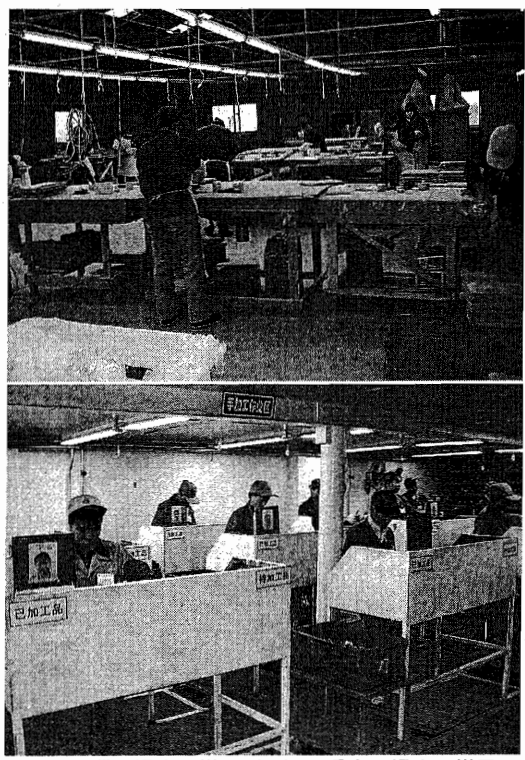


倉永総経理(前列左端)と一緒に(後列右端が陶さん)

の日の訪問内容の記録作成と翌日の資料準備があり、かなりハードなスケジュールとなりました。しかし、いろいろな企業の現場を見て、社長さんのお話をうかがうことで、大変な勉強になりました。  
訪問先でお会いして最も印象に残ったのは、家具の輸出製造販売を手がける増本木業有限公司会長の増本公勇さんでした。増本さんは1994年、安価な労働力とインフラコスト削減を求めて、大連に工場を作りました。しかしながら、材料、労働力の質、現地政府との付き合いなどさまざまな問題を抱え、会社は5年連続で赤字だったそうです。しかし、そこで諦めず中国と粘り強く交渉し、

大連は、かつて第2次大戦中に日本の植民地だったこともあり、町には日本の文化が散らばっています。中国国内では、日本人にとって最も住みやすい町のひとつでしょう。ちなみに自身は山東省潍坊市の出身です。たご揚げで有名な観光の維持ですが、産業面では大連のほうが先進的だと感じました。  
大連出身でゼミの先輩の楊さんにアレンジしていただいたおかげで、JETRO大連事務所ならびに企業8社を効率的に見学して回ることができました。業種は、冷凍マグロの加工からファスナー製造、さらには電気製品までと多様です。1日に2社ずつ回るために、朝8時に出

発し、ホテルに戻るのには夜6時か7時でした。夕食後には、そ



増本木業工場内の様子(上)と愛光工場内の様子

一つ一つ問題を解決していきました。現在、競争力を確保した会社の売り上げは順調に伸びています。大連市内に5つの家具店を展開、日本へも輸出しています。  
「この国ほど超自由主義で、本当にアツケラカランとした国はない。しかし、その一方で56民族13億人いるとすれば、鍵をかなければいけない所には鍵をかけ、話してはいけないことは絶対に話さない。そういう鉄則を国民自身が持っている。国家であっても個人であっても会社であっても、恥部は絶対外に出さない。これが長い歴史の中で、中国人が身につけたことだ」と思う。そう語る増本さんは、中国人の習慣と文化をよく理解したうえで、現地スタッフや政府に柔軟に対応しています。  
もう一人、大連愛光漫漬成型有限公司の総経理、倉永和男さんのことも強く印象に残っています。倉永総経理は中国ハルビン生まれの非常に元気な社長さんです。この会社は従業員450人、車両用絶縁クリップを主に生産しています。

倉永さんのユニークな点は「愛と信頼」を経営理念に掲げ、社内で茶道などの日本文化を社員に教えていることです。現地のテレビ番組にも紹介されました。さらに日本人シニア人を登用したり、亜細亜大学と連携して毎年インターンシップを行うなど、日本との交流・人材活用にも積極的です。  
大連の外資系で経営状況が一番良いのは日系企業ですが、それはこのような努力の成果と言えるでしょう。中国では、08年に北京オリンピック、10年に上海万国博覧会を控えています。大連でも、そのためのまちづくりがもう始まっています。接客態度やマナー、二み問題なども改善されていくとは思いますが、日本のレベルにはなかなか追いつきません。  
これから中国に進出する企業は、文化や習慣に積極的に慣れるよう努力していくしかありません。現地の事情をよく理解したうえで日本の管理方式を導入すれば、大連も日本の進出企業もさらに発展していくことでしょう。